

# 第 64 回東北造形教育研究大会青森大会

## 公開保育の取り組みについて

—— 子どもの自発的な遊びを育む造形環境 ——

池田 拓馬

### 要旨

本稿は第 64 回東北造形教育研究大会青森大会及び 2019 年度青森県造形教育研究大会八戸・三戸大会、大会主題「深い学び 伝える喜び つながる感動」副題～“ひと・もの・こと”とのかかわりのなかで～、における幼稚園部会において八戸学院幼稚園にて実施された公開保育の実践に至るまでの過程をまとめ報告するとともに保育における遊びから発展する自由な造形とは何か、またその環境設定の方法について考察し提示するものである。

キーワード：幼児教育|美術教育|造形教育|アトリエリスタ

### 1. はじめに

本公開保育は八戸学院大学短期大学部と八戸学院幼稚園の連携として毎年実施されている美術専任講師による造形教室の延長として行われた。また八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科 佐貫巧准教授のゼミナールで実施されている「八戸マテリアル・アプローチ ～あそぶ、こども、あーと～」<sup>1)</sup>からきっかけを得て、身近な廃材を利用した造形活動というテーマを設けた。公開保育は「私たちのユートピアを作ろう」と題した活動で 2019 年 7 月 31 日に八戸学院幼稚園にて実施された。

幼児が自ら工夫し試行錯誤しながら新たな技術や思考を獲得していく手がかりとして遊びの延長とした造形活動、不定形の素材や手順の明瞭でない造形課題を取り入れ、同じ手順で同じ造形物ができる活動は極力避け実施することを目指した。

### 2. 対象および方法

第 64 回東北造形教育研究大会青森大会にお

ける八戸学院幼稚園公開保育には筆者および八戸学院大学短期大学部幼児保育学科 佐貫巧准教授、八戸学院幼稚園教諭 中山千敬教諭、成澤友信教諭によって実施された。公開保育の対象クラスはそら組、にじ組の園児計 41 名である。園児が年中児であった 2018 年度には年間に計 7 回の造形教室を実施した。クラス編成はつき組、ほし組である。2019 年度に年長児となった同園児を対象に 3 回の造形教室を行った後、その活動を踏まえた上で公開保育を行った。

#### 2-1 年中児活動の内容

2018 年度の造形教室では身の回りにある環境で使われ捨てられていく廃材を利用することを決まりとした。素材はそれぞれ「牛乳パック」「包装紙」「レジ袋」となった。その 3 つの素材について 2 人の講師が造形のアイデアを持ち寄り佐貫准教授及び筆者はそれぞれのクラスを交互に担当した。園児は 1 つの素材に対して 2 種類の造形活動を体験し、3 種類の

素材から計 6 種類の造形活動を体験した。ただし初回の造形教室のみ学年合同で造形教室を行い、講師に慣れることや友人同士の共同作業を深めるねらいを持って地域の廃材は使用しなかった。初回の活動も含め筆者が企画し行った造形活動を以下に紹介する。

タイトル：「おりがみどうろをつくろう」

2018 年 5 月

対象：そら組、にじ組 全園児 41 名

実施体制：池田、佐貫准教授、担任教諭

材料：帯状の色画用紙、セロファンテープ

内容：園児が二人一組となり帯状の色画用紙をセロファンテープでつなげ道路を作る。空想の街を広げる様に教室中に道路を張り巡らせ、最終的にそれぞれの街をつなげ、大きな造形作品とする。日常の空間が表現の大きな支持体<sup>2)</sup>となり空間全体を動きながら体全体を用いて行う造形活動。



図 1 「おりがみどうろをつくろう」二人一組で画用紙をつなげる様子

タイトル：「牛乳パックからカザグルマ」

期間及び対象：

2018 年 6 月ほし組、7 月つき組

実施体制：筆者、担任教諭

材料：牛乳パック、オイルパステル、割り箸、竹ひご、網戸のパッキン

内容：カザグルマになる展開図にあらかじめ切りそろえた牛乳パックにオイルパステルで自由に絵を描く、割り箸と竹ひご

を組み合わせた躯体に牛乳パックを決められた手順で取り付けていく、小さく切った網戸用のパッキンでカザグルマの先端をとめる。手順に従って組み立てる技能を養うとともに、カザグルマが風の力を用い回転すること、回転することによって描いた図柄が混ざり合うことを感じることをねらいとした。



図 2 「牛乳パックからカザグルマ」牛乳パックにオイルパステルで着彩する様子



図 3 「牛乳パックからカザグルマ」完成したカザグルマを使って園庭で遊ぶ様子

タイトル：「包装紙を用いた自由造形」

期間及び対象：

2018 年 9 月ほし組、10 月つき組

実施体制：筆者、担任教諭

材料：地域の商店や百貨店などで使用されている包装紙、セロファンテープ、サインペン

内容：紙は丸めたり筒状にしたりすることで立体になることを伝えた後、自由に造形する。援助はテープの貼り方や紙の扱い方などに限定し、自ら思考し造形する想像力を養うとともに、自由にイメージを

広げられるよう配慮した。

完成した作品にそれぞれタイトルを考え、「遠いところまでピョーンと飛ぶバネ」「虹が見える望遠鏡」「イヤリングとワナと小さなゴミ箱」など園児のユニークな想像力が込められたタイトルが多くみられた。



図 4「包装紙を用いた自由造形」活動の様子

タイトル「レジ袋を用いた凧づくり」

期間及び対象：

2018 年 11 月ほし組、2019 年 1 月つき組

実施体制：筆者、担任教諭

材料：レジ袋、スズランテープ、カラーマーカー、セロファンテープ

内容：地域のスーパーや商店などで配布または購入される「レジ袋」を用い凧の制作を行った。制作に入る前にレジ袋をふわっと浮かせてみせ、ビニールがとても軽く浮かびやすい素材であることを紹介し、ものの持つ特性を知るとともに園児の制作意欲を引き出すことをねらった。

カラーマーカーでビニールに思いおもいに絵を描き、スズランテープで尻尾をつけ、レジ袋の持ち手にスズランテープを結び凧の持ち手を取り付けた。

外に出て遊ぶ前から園児はビニールがふわっと浮かぶ動作をし始め、事前に見せた、動作を真似している様子が見られ、素材の特性を理解し体感している様子が伺えた。

その後は外に出て各々に走り回った

り一斉に走ったりしながら凧揚げを楽しんだ。楽しく自由に造形を行うこと、作った造形物を用い遊び楽しむという一連の関係性を体感することで、園児にとって造形活動への意欲や肯定的な感情が養われる活動となることをねらいとした。



図 5「レジ袋を用いた凧づくり」ビニールが風の抵抗で浮かぶことを確かめる園児

2-2 年中児にて 2018 年度に行った造形活動のまとめ

このように「おりがみどうろつくろう」における教室全体を使用した造形活動、生活環境から発生し日常であれば使用後は廃棄される素材である牛乳パック、包装紙、レジ袋などを使用した造形活動を行ってきた。佐貫准教授と筆者で 2 クラスを交互に担当することで、各クラス年間 7 回の造形教室、造形活動を園児は体験した。

こうした取り組みによって、園児の造形に対する印象は、教室の机に座り画用紙に絵を描くという行為だけではなく、生活環境そのものが造形のための素材を探す「造形活動の準備時間及び場」となり、空間全体が「造形活動のフィールド」となったのではないだろうか。自ら見つけ持ち寄った素材を用い造形することで造形活動に至るまでの行動と造形物という結果がひとつながりの関係性を持ち造形に対する意欲や動機が育まれたと期待する。さらに空間全体を造形活動の場とすることや作ったもので遊ぶことも造形をより身近に遊び

と近い状態とすることもねらいとした。

活動の期間、内容、対象、実施者をまとめた表は次の表 1 の通りである。

表 1 年中児対象におこなった造形教室

期間	内容	対象	実施者
2018 年 5 月	おりがみどうろをつくろう	全園児	池田 佐貫
6 月 7 月	牛乳パックから手すきカード	つき組 ほし組	佐貫
6 月 7 月	牛乳パックからカザグルマ	ほし組 つき組	池田
9 月	包装紙を用いた木の葉作り	つき組	佐貫
10 月	包装紙と風船を利用した張り子作り	ほし組	佐貫
9 月 10 月	包装紙を用いた自由造形	ほし組 つき組	池田
11 月	レジ袋を用いた楽器作り	つき組	佐貫
11 月 2019 年 1 月	レジ袋を用いた凧づくり	ほし組 つき組	池田
1 月	ゴミ袋をつなげたエアーパーン	ほし組	佐貫

### 2-3 子どもの遊びと造形活動の合流

年中児の造形教室ではこれまで説明したような活動を 2018 年度 1 年間を通して行ってきた。その活動を行う中で園児が自由時間などに自ら始めた遊び「ダンボールハウス作り」があった。きっかけは当時の年長児の「人形作り」を見ていたある園児が自由時間に真似をし始め、次第に他の園児にも影響を与え様々な園児が人形作りを始めたことだった。さらに「人形の住む秘密基地を作りたい」と言い始めた園児にほかの園児も賛同し「ダンボールハウス作り」へと遊びが発展した。

この「ダンボールハウス作り」を「街づくり」へ発展させ、身近な環境から生まれる素材を用いた佐貫准教授の活動「八戸マテリアル・アプローチ」とつなげ、八戸の材料で園児たち

の街を作る活動「私たちのユートピアを作ろう」という活動を行うことになった。

### 2-4 年長児にて行った造形活動

「私たちのユートピアを作ろう」という活動につなげるために 2019 年度年長児の造形教室を 8 月の公開保育までに 3 回行った。内容は次の通りである。

タイトル「しろしろ shiro」

対象：そら組、にじ組、年長園児 41 名

期間：2019 年 5 月

実施体制：佐貫准教授、筆者、担任教諭

材料：綿棒、紙皿、プラスチック等の白い素材、木工用ボンド、グルーガン、木製パネル

内容：佐貫准教授がゼミナールや「現代芸術教室 アートイズ」<sup>3)</sup>などの造形形教室で行なっていた活動を本造形教室にとりいれた。様々な白い素材をできる限り多く集め、園児はそれらを自由に使用する。支持体の木製パネルの上にボンドやグルーガンを用いレリーフ状に造形する活動である。素材が無彩色であるため、素材そのものの形や質感が重視され、素材と素材の特性の違い、組み合わせにより生まれる形に対し敏感になりながら造形活動ができる。またでき上がる作品は見る限りでは抽象的な作品となっていたが、園児は個々にイメージを持ち「この造形は煙突だ」や「こういう仕組みを持っている」などと語りながら活動を進めていった。

最終的に園児の作ったパネルを升目状に並べ壁に展示した。様々な抽象的な形の組み合わせは見る側の想像力をかき立てる作品となった。





図 6 「しろしろ shiro」材料選びの様子



図 7 「しろしろ shiro」造形の様子

タイトル「箱庭制作」

対象：そら組、にじ組、年長園児 41 名

期間：2019 年 6 月

実施体制：佐貫准教授、筆者、担任教諭

材料：箱庭用の砂、各種玩具、人形など

内容：約 5 人 1 組の活動とした。人形や玩具を一つ選びそれを自分と見立て砂を敷き詰められた 90cm 四方程度の本箱の中に配置する。自分と見立てた人形を起点に他の玩具や、木、人形を自由に配置していく。箱の底面は青色のパネルが貼られており砂を掘ることで陸や海を表現できる仕組みとなっている。

砂や玩具は何度も再配置が可能で描画等の活動とは違い何度でもやり直しができる柔軟な造形活動である。また 5 人 1 組の活動としたことで他者との関係性の中で自らの考えを主張または受け入れながら協調性を育み制作する能力を養うことも目的とした。園児は用意した玩具が全てなくなるまで作業し

それぞれのグループによって全く違う特性が見られる作品となった。

恒久的に形を止める作品では無いため制作者の園児とともに写真を取りそれを完成年記録とした。



図 8 箱庭を共同し制作している様子



図 9 箱庭制作完成記録

タイトル：

「私たちのユートピアを作ろう(予行練習)」

対象：そら組、にじ組、年長園児 41 名

期間：2019 年 7 月

実施体制：佐貫准教授、筆者、担任教諭

材料：大きな筒(三菱製紙から譲り受けた)、ダンボール、ペン、牛乳パック、ガムテープなど様々な素材

内容：幼稚園のホール全体を使用しこれまで自由時間に遊びとして制作してきた「ダンボールハウス」を発展させる造形活動を行った。また公開保育当日の予行練習としての活動でもあった。素材として用

意した大きな筒やダンボールを自由に組み合わせ、「研究所」「テーマパーク」「秘密基地」など園児自身が決めた自由な発想で造形を行なった。さらにそれぞれの作品の細部には細かく意味や目的、機能などが具体的に定められており内なるイメージを自由に表現している様子が伺えた。

年長児になってから行なった造形教室の一覧は表 2 の通りである。



図 10 三菱製紙から譲り受けた筒を用いて造形している様子

表 2 年長児対象に行った造形教室

期間	内容	対象	実施者
2019 年 5 月	「白シロしろ」	そら組、にじ組、全園児 41 名	佐貫池田担任教諭 2 名
6 月	「箱庭制作」	同上	同上
7 月	「私たちのユートピアを作ろう」(練習)	同上	同上
7 月 31 日 公開保育当日	「私たちのユートピアを作ろう」(本番)	同上	同上

## 2-5 公開保育当日の活動

これまでの年中児から年長児の間に行った造形教室の活動と園児が自発的に始めた遊びの内容を考慮しそれらが合わさり発展することをねらいとして公開保育を行なった。前回行なった造形教室からさらに園児の想像力を

引き出すため、遊戯室のホール床面には白色のビニールシートを敷き詰め床面にも直接絵を描けるようにした。また造形の思考が平面的にならないよう天井から農業用の網をかけ空間全体に意識が向くようにも配慮した。活動の概要と内容は以下の通りである。

タイトル「私たちのユートピアを作ろう」

対象：そら組、にじ組、年長園児 41 名

日付：2019 年 7 月 31 日

時間：10 時～11 時

実施体制：佐貫准教授、筆者、担任教諭 2 名

材料：大きな筒(三菱製紙から譲り受けた)、布きれ、ダンボール、ペン、牛乳パック、ガムテープなど様々な素材

内容：前回の造形教室とこれまでの自由活動の時間に制作した「ダンボールハウス」を前述した空間全体に配置し、造形活動の妨げとならないよう材料と道具をなるべく舞台側の壁際に配置した(図 11)。また材料の見せ方には特別に配慮し、一目でどんな素材があるかわかるよう素材を特性ごとに分類し、重なりも極力避け平面的に並べた。直感的に材料が選べることで造形のイメージが失われないよう、またさらにイメージを膨らませ易いよう配慮した。

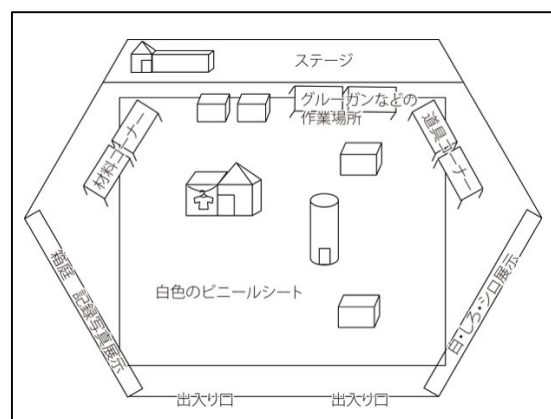


図 11 公開保育会場 材料等の環境構成図

園児は自由にダンボールを組み立て



これまで制作した「ダンボールハウス」をさらに大きくしたりビニールシートを敷いた床にマーカーで直接道路を描いたり、線路を描いたりした。さらにその線路に合わせ牛乳パックなどで電車を作るなどイメージの発展や関連付けが見られた。本当の街が発展するようにダンボールハウスの周りに関係性を持った空間や造形物が作られていった。



図 12「私たちのユートピアを作ろう」園児同士が相談しながら制作を進める様子

作られたものは新幹線の車両や線路、レストランやケーキ屋さん、工場や秘密基地、研究所など一つとして同じ造形物はなく、一人ひとりの想像やイメージが形になる様子が見られた。また制作をしている園児に何を作っているのかと話しかけると作品の意味や名前、その機能や役割など詳しく話す様子が見られ、自らのイメージと動機によって支えられた造形活動を行なっていることが実感できた。



図 13「私たちのユートピアを作ろう」制作の様子



図 14「私たちのユートピアを作ろう」公開保育を終えた後の様子(仮完成)

### 3. 結果「あそび」の可能性を広げるために

このように子どもが自分自身で内容を決め、材料を選び制作することにより創造的な作品が制作できたのではなだろうか。そのために行った内容を配慮してきた項目を以下に振り返る。

#### 3-1<材料と道具の種類と提供方法の配慮>

材料や道具に対し最大限に規制を設けず園児が使用し易いように提供することを心がけた。材料は特に市販されている教材や画材に限定せず、廃材などから生活で使用する紙皿や綿棒のような使い捨ての道具を造形材料として提供した。材料と道具を最大限に提供するよう心がけ、園児が 1 つのアイデアを実現させようとした時に 3 つ以上の材料や道具の選択肢があることを想定し用意した。その環境のもと園児は自分のアイデアを実現させようとする時にいくつかの選択肢の中から自分の意思で材料を選ぶことになる。その行為が自ら思考し選択する能力を育み、イメージを形として実現させた際はその選択と結果を関連付けることで自分自身に肯定的な感情を持つきっかけとなると期待した。さらにその積み重ねが自発的な思考力や探究心、さらには自己肯定感を育み、造形的な活動をきっかけとし様々な事柄に挑戦する意欲や自信

を育むと期待する。

### 3-2<キャンバスを大きくし額縁を作った>

ここで言うキャンバスとは実際の油彩画で使われる支持体としてのキャンバスではなく空間や制作可能な領域全体を指す。

一般的な描画としての造形活動の制作領域は画用紙の四角い領域のみである。それを2018年5月に取り組んだ「おりがみどうろをつくろう」のように空間全体を制作領域とすることで、園児はのびのびと制作に取り組むことができた。領域を広げることは結果的に「自由」になったが、最も大切な要素は「制約が少なくなった」ことすなわち「絵が画用紙からはみ出してしまう」ことや「机や床を汚してしまう」と言ういわゆる「失敗」を考える必要がなくなり造形活動そのものに純粋に集中できる状態となっていることではないだろうか。また失敗が極力無い状態を作ることが「のびのびとした表現」につながったと言えると考ええる。

さらに額縁を作ると言うことは作品に額縁を実際に取り付けることではなく空間そのものが子どもの素朴な表現を支える額縁となるよう配慮することである。現代美術の分野でもホワイトキューブ<sup>4)</sup>と呼ばれるギャラリーや美術館の展示室の様式が1970年代から用いられてきた。それらはインスタレーション<sup>5)</sup>などの多様な作品形態に対応した展示室の様式で最小限の要素に限られた真っ白な空間そのものが作品の額縁そのものとなるという考え方である。子どもの素朴な作品もただ雑然とした空間に配置させるのではなく、天井から吊るした網や床に敷いた白いビニールシートのようにそこに子どもの作品が配置されることで空間が引き立つような環境構成を心がけた。さらに華美な装飾は避け、子どもの作品が最も引き立つよう必要最低限の要素で構成することも大切な要素であるとし環境を構成した。

### 3-3<題名を子どもの言葉で書く>

園児が年中児の際2018年9月と10月に行った造形活動の「包装紙を用いた自由造形」では、会話をするように題名を引き出すこと心がけた。今回の公開保育では一つ一つの作品に題名をつけたわけではないが、制作を始める前に「○○を作ってみよう」や、制作をしている際に「これは○○だね」と言う作品のイメージを限定する言葉がけはしないよう配慮した。常にクエッションマークを語尾に入れるような言葉がけ、または会話が続くような言葉がけを行い「何を作っているの?」「ここはどうして○○になっているの?」などと大きい視点や、細かな視点など状況を見ながら問いかけを繰り返し、子どもの言葉を引き出した。それによって子ども自身が作品について言葉を発する機会を作り言葉によって作品やイメージを意識的に理解するきっかけにするとともに、イメージが強まったり膨らんだりするように配慮した。

### 3-4<地域のアーティストを活用し・保育者と連携する>

本公開保育にを実施した筆者及び、佐貫准教授は保育士養成校の美術専門の教員であると同時に美術家として活動する画家及び現代美術作家のアーティストでもあった。その美術の専門家と教育の専門家である幼稚園教諭が共同して造形教室を行うことはレジャエミリアアプローチで試みられてきた「アトリエリスタ」と「ペダゴジスタ」のティームティーチング<sup>6)</sup>の状態ととても酷似した実施体制となっていた。佐貫准教授と筆者はレジャエミリアアプローチのようにアトリエリスタとして日々園児と関わることはなかったが、公開保育以前から定期的に造形教室を開催してきたことは今回の公開保育のプロジェクトに至るまでに園児の造形活動の意識づけに影響していると言える。



また日々の子どもの心身を支え発達を援助するのは担任教諭である保育者の支援が不可欠であり、「造形の奇抜なアイデア」だけでは子どもは生き生きとした造形は行わないだろう。そのように子どもの思いに気づき、寄り添う保育者の存在は、例えて言えば植物における「土壌」そのものではないだろうか。またアトリエリスタとして関わった筆者及び佐貫准教授はその「土壌」に対し美術の専門的な知識や経験に基づいた発想や助言を保育環境に外部から流入してくる「雨」や「水」に例えられる。公開保育の環境構成や材料の選出、作品の展示方法などはどれも担任教諭や他の保育者から想像もつかない方法だったと感想があった。しかし子どもにとって最も大切なことは、やはり寄り添い見守り、思いに気づく身近な存在の保育者である。保育者が子どもの状況を美術の専門家に伝えることにより私たちも適切な助言やその状況に即したアイデアを提案できた。そうした仕掛けや環境を構築することで子どもの自発的な遊びを促し、新しい発見や新たな表現欲求を芽生えさせることができたのではないだろうか。

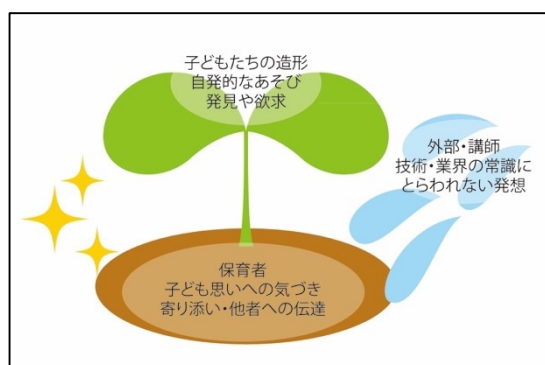


図 15 外部講師、保育者、子どもの関わり方

#### 4. 考察

このように私たちは子どもの自発的な遊びやアイデアを尊重した造形活動を行うために様々な方法を試みてきた。それは子どもの生活環境と関係した素材を利用することで、幼稚園以外の生活でも造形のことを意識するき

っかけを作り、生活と造形の間に地続きのイメージを芽生えさせるよう意図したことであったり、造形した作品がそのまま遊び道具や自然の力などを感じられる道具となることで、作ることと体を動かし遊び、感じる事が一体となり、造形に対し肯定的なイメージを芽生えさせることでもあった。さらに子どもの言葉をそのまま題名とすることで発言を尊重し肯定する環境を提示する。それによって子どもは発言や意思を表明する意欲を大きくさせることができ、箱庭の造形教室からは他者と協議し一つのものを作るという高度な制作技術、共同制作の技能も獲得することができた。

これらと対照的にある造形は例えば同じ大きさの画用紙に同じ素材で絵を描くこと、描く内容も指定してできあがった作品は多少の差こそあれ大体同じような作品に仕上がった、そんな作品ではないだろうか。さらに「人体」や「顔」といった題材を大人の思い描くイメージで描かせようとするために「つい手を握って描かせてしまった」そんな経験がある保育者も多いのではないだろうか。

ではなぜ我々が公開保育のために行ってきたプロジェクトのような活動が教育現場に取り入れにくいのかというと、労力が大きくわかりにくい結果に見えるからではないだろうか。手間がかかり利益の出ないものを人は進んでしようとしにくい。また保育者は純粋に子どもの遊びや自発的な活動だけを注意し保育をしているわけではない。実際にある幼稚園では年間に夕涼み会やバザー、保護者参観、演劇や演奏の発表会、作品展示会など様々な行事がある。それらを実現させるためには子どもに演奏技術やセリフなどを憶えてもらわなければならないこと、「制作してもらわなければならない作品」が無数にある。また同時にそのように教えることが日常化してしまう。そういった連続性の中では日頃の保育の成果やできごとを第三者にわかり易く伝えようとする作

品を子どもに描かせることに対しても疑問を覚えなくなるかもしれない。その結果、作者である子ども自身のために作られたのではなく誰かのために「作らされた作品」が教育現場に生み出されていくのではないだろうか。

けれども子どもの自発的な遊びやアイデア、思いを汲み取った造形活動を行うことは難しいプロジェクトではない。子どもが自由に材料を選ぶことができ、作っても良いという許された環境を作ることが造形活動そのものを作ることになる。行事や展示会を目的としそこから逆算し造形活動を決めるのではなく、日常の子どもの遊びを起点とし、そこからヒントを得て内容を決定していくことが何よりも大切だと考える。

## 5. おわりに

私たちは知らず知らずのうちに、それぞれの業界の観念に囚われていることがある。自身の観念に自ら気づき変化させていくことは無意識にできることではない。変化させ新しい発想を保育の現場に取り込むため美術を専門とする人材を活用することは効果的ではないだろうか。今回の保育者養成校と同法人内の幼稚園の連携というような環境がなかったとしても地域にはアーティストや様々な技術を持った人材があり、その資源を活用することは保育業界の常識や固定観念にとらわれない新しい技術や発想を保育の現場にもたらしうることができる。また有用である一方、筆者のような外部講師には園児たちの日頃の姿を見なが

ら自発的な活動を育むことは難しい。保育者が日常的に子どもの思いを受容し遊びの可能性を援助するという基盤があって初めて機能するとともに、それらがティームティーチングとして合わさり協働することで外部講師にも発見をもたらし広く地域の活性化にもつながるのではないか。「子どもとあそび」、「保育者」、「地域のアーティスト」が掛け合わされることでその地域、その保育現場のオリジナルの保育及び教育につながるのだとこの実践から感じ取ることができた。

## 参考文献

「保育を開く造形表現」 槇英子 萌文書林  
2008 年

「驚くべき学びの世界 レッジョエミリアの幼児教育」 佐藤学 監修 株式会社 access  
2011 年

## 謝辞

本公開保育に至るまでの約1年と4ヶ月の長期間、八戸学院幼稚園 園長 道合康子先生をはじめ教頭 岩館由香里 先生、主幹教諭 河原木祥子 先生、担任教諭、八戸学院幼稚園の教職員の皆様には何度も打ち合わせを重ね公開保育当日まで多大なお力添えをいただきました。この場を借り心より御礼申し上げます。

## 著者紹介

八戸学院大学短期大学部 幼児保育学科  
講師 池田拓馬

## 脚注

1) 佐貫巧准教授の行うプロジェクトの一つ、八戸圏域の隠れた資源を探し出し、子どもの創作活動の材料として活用するというものである。文化芸術活動による魅力発信につなげることで、子どもの感性や可能性を最大限に引き出し、アートを通じた創造的な表現の一助となることを目的とする。

2) 芸術作品がそれとして存在することを

「支持 support」するもの、すなわちその物質的な基盤となるものを意味する。各芸術ジャンルに固有の構成要素（絵画ならば絵具、彫刻ならば木や銅などの素材、音楽ならば物理的現象としての音）に相当する「メディウム」に対し、「支持体」は文字通りそれを「支える」ものに相当する。とはいえ、一般にキャンバスを支持体とする絵画を例外として、各ジャンルにおける「支持体」を同定するのはしばしば困難を極める。（『現代美術

---

用語辞典 ver. 2.0 - Artscape』著者：星野太  
<https://artscape.jp/artword/index.php/支持体>)

3) 「現代芸術教室 アートイズ」幼児、小学生、大人を対象とした造形教室。作るだけでなく現代美術の視点から、発見し、考え、楽しむを学ぶ現代美術教室。八戸市新美術館建設推進室を始め十和田市現代美術館、幼稚園、保育園など様々な場所で造形教室を開催。全国、地方など様々なメディアに取り上げられている。  
(<http://artis8nohe.mystrikingly.com/>)

4) 近代以降につくられた、美術作品の展示空間に見られる、白い立方体（ホワイト・キューブ）の内側のような空間的特性を指している概念。アメリカの美術批評家、作家ブライアン・オドハーティ Brian O'Doherty (1935— 、パトリック・アイルランド Patrick Ireland の名で美術作家としても活動している) が、1975 年 1 月にロサンゼルス・カウンティ美術館で行った講演「ホワイト・キューブの内部で——1855—1974 年」Inside the White Cube, 1855-1974 で提起したのが始まり。(『日本大百科全書』(1984～

1994 刊：全 26 巻) )

5) 据え付け、取付け、設置の意味から転じて、展示空間を含めて作品とみなす手法を指す。(『現代美術用語辞典 ver. 2.0Artscape』、著者：成相肇  
<https://artscape.jp/artword/index.php/インスタレーション>)

6) レッジョ・エミリアの幼児教育は、市内のすべての乳児保育所(0 歳から二歳)と幼児学校(三歳から六歳)において創意的な挑戦が積み重ねられ、ユニークな教育方法を生み出してきた。すべての乳児保育所と幼児学校に「ピアッツァ」と呼ばれる共通の広場と、教室に大小二つの「アトリエ」(美術室)が設けられ、「アトリエリスタ」と呼ばれる芸術の専門家と「ペダゴジスタ」と呼ばれる教育学の専門家が配置され、教室ごとに二人の保育者によるティーム・ティーチングが実施された。(「驚くべき学びの世界 レッジョエミリアの幼児教育」 佐藤学 監修 株式会社 access 2011 年 8 ページ)